

活動報告

和歌山地域経済研究機構主催 シンポジウム 「持続可能なまちづくりを目指して～わかやま！LOHAS 2040～」

日 時： 2014 年 7 月 15 日（火）18:30～21:00

会 場： 和歌山商工会議所 4 階 大ホール

プログラム：

第一部 研究成果発表

- コーディネーター 足立基浩（和歌山大学経済学部教授、以下、足立）
 全体発表 木下雅夫（和歌山社会経済研究所常務理事、以下、木下）
 各論発表 大泉英次（追手門学院大学経済学部教授、和歌山大学名誉教授、
 以下、大泉）
 鈴木裕範（和歌山大学南紀熊野サテライト客員教授、以下、鈴木）
 中平匡俊（和歌山社会経済研究所主任研究員、以下、中平）

第二部 パネルディスカッション

- コーディネーター 中村榮三（和歌山放送専務取締役、以下、中村）
 ゲスト 2014 年和歌山市長選挙 立候補予定者¹
 パネリスト 足立基浩（和歌山大学経済学部教授、以下、足立）
 木下雅夫（和歌山社会経済研究所常務理事、以下、木下）
 糺谷昭治氏（NPO 法人市民の力わかやま理事、以下、糺谷氏）



吉村典久理事長（和歌山大学経済学部長）による開会挨拶のあと、第一部では、平成 23 年から平成 25 年の 3 年間に亘り、和歌山市のまちづくりの将来像について研究を重ねてきたまちづくり戦略研究会の研究成果報告書『持続可能なまちづくりを目指して～わかやま！LOHAS 2040～』に基づく研究成果の発表と意見交換を行った。つづいて、第二部では、第一部の研究成果の発表を基に、和歌山市長選挙の立候補予定者をゲストに迎え、2040 年の和歌山市像とまちづくりについて主に 3 つのテーマに絞って政策討論を行った。以下は、その要旨である。

¹ ゲストの名称については、シンポジウム開催時のものを参照している。

■ 第一部 研究成果発表

【足立】

和歌山大学の足立です。どうぞよろしくお願いします。まず第一部として、和歌山地域経済研究機構（和歌山商工会議所と和歌山社会経済研究所それと和歌山大学）がひとつになって地域の活性化についてずっと議論してきました。その中で、過去十数年にわたって和歌山市の中心市街地活性化や、まちづくりのありかたを一つの研究会として取組んできたことをその研究者のみなさんから発表をいただきたいと思います。その前に私の方から簡単に和歌山の現状について説明します。和歌山は人口減少がかなり進んでおり、先日ある民間の団体が2040年に消滅してしまう自治体がある、ということを大きく問題提起されました。実は残念ながら和歌山県の一部のまちも中に入っております。さらに、データのみにて、和歌山は貯蓄率が高いけれど消費量がすくない。また、まち、都市が拡散して面的に広がってきているといえます。その結果、交通費やタクシー代が高いからと言ってあまりお酒とか飲みを中心に部に行かなくなってきて、飲食でいろんな飲み屋さんへ行く消費量が全国ワースト1位となっている、消費はあまりしない、そういった特徴のある地域でもあります。これが和歌山市です。それではメンバーのみなさんからお話しをいただきたいと思います。それぞれの研究テーマに沿ってまずは木下さんからお願いいたします。



【木下】

今日のシンポジウムのテーマは「持続可能なまちづくりを目指して」～わかやま！ LOHAS 2040～というタイトルをつけています。23年度から3年間続けて研究に取り組み25年度に研究成果を発表しました。今足立先生からショッキングなデータを発表していただきました。だから今の状況から考えますと、このままであってはまずいと思うか思わない



いかだと思えます。したがって、まず和歌山市の全体をどう考えるか、中心市街地あるいは個別の地域の発展等は当然必要ですが、トータルとして和歌山市全体をどう考えるかという視点が非常に重要だと思います。だからこの研究会では、3年間通して和歌山市全体をどう捉えて、どういう姿を市民の方々に示せるかというスタンスで議論を重ねてきました。その成果が本日の発表であり、報告書です。なぜまちづくりが必要なのか？そして単なる個別のまちづくりではなくて戦略的に他の都市とも競争しても勝てるまちづくりとは何か？そして、その必要性和目指すべき方向性をまず我々は考えました。避けて通れない人口減少、少子高齢化。そして単独高齢化世帯の増加。これも全国トップクラスです。その結果として、地域コミュニティが劣化、崩壊しつつあります。地域の活動、あるいはお互い隣近所で助け合うというようなことも困難になってきています。それと、物理的に空き家・空き地が増加しています。その結果、中心部でも環境が劣化して限界集落、消滅集落につながっていくことが予想されます。一方で車

社会、ライフスタイルの変化等で郊外化が進展しています。このアンバランスさは、間違いなく都市機能と生活空間が劣化した衰退型のまちへとつながるといえます。これは和歌山市だけではないのですが、だからこそ、他都市との競争の中で和歌山市がいかに早くこれに気づいて対策を講じるかがポイントになると思います。方向性に関しては、空き地・空き家が増加する中では従来のままの面での展開あるいは進展は考えられないでしょう。したがって、ある一定の地域に機能を集約しそこに居住する、その生活インフラを集約した集約型あるいは拠点化ということが必要になるでしょう。それによって地域の再生を図ること。これが過去から言われてきているコンパクトシティの推進ということであり、我々が目指すまちづくりのイメージの全体像です。このイメージの構成要素として、まず目指すべき方向性あるいはビジョンを明確に示すことが必要です。個別の展開は必要ですが、それはあくまでいわゆる単品の開発推進であって、和歌山市全域を、いかに有機的に効率的にまちづくりを進めるか、この観点がとても重要です。LOHASという言葉はちょっと使いふるされた言葉ですが、改めてこれを進めていきたいと考えています。次に、基本コンセプトとグランドデザインとして、いくつかの地域を連携するコンパクトシティを推進する。それから基本スキーム（取組手法）として、「賢く縮小し、賢く成長する」をキーワードとする。縮小と成長は相反するものではない、それを実現していきたいということです。その結果として、和歌山市全域を考えたゾーニングを考えていきたいのです。この時重要なのは、個別地域と全体を有機的に連携させるエリアマネジメントという発想です。やはりそれぞれの地域をいかにコントロールし運営していくか、また、他の地域との連携がうまくいくかという考えが必要です。それから最終的にロードマップが不可欠です。順を追って目標を定めて推進し、最終的に“わかやま LOHAS2040につなげていく”ということが必要です。

【足立】

今、木下さんのお話の中でキーワードが2つ出てきました。1つがLOHAS。健康的で住みやすいまちづくり、次の世代に残せるような持続可能なまちづくり。二つ目は、コンパクトシティ。つまり都市の機能を集約して歩いて楽しいまちづくり、自動車に依存しないようなまち、であったかと思います。それでは続いて中平さんお願いします。

【中平】

私たちはこの「まち」をどんな「まち」にしたいのか？というテーマについて、都市の将来像をフリーハンドで描ける利点を活かした「まちづくり」という観点で考えてみたいと思います。まず、「まち」は色々な要素で構成されています。道路や住宅、公共施設や商業施設、自然や景観などです。しかし、絶対に存在しなければならないのが「人」です。「人」がいなければ「まち」は成立しません。この「人」が、いま言いましたような色々な構成要素をいかにうまく使い込むことができるかという事が重要な点です。



つぎに、「都市計画」と「まちづくり」について、どう違うのか整理しておきたいと思

います。「都市計画」は、専門的な議論を経た物的な開発計画を中心とする都市基盤づくりという意味合いが強く、いわば「定規」を使って「都市」の将来像を描くようなイメージです。一方、「まちづくり」はフリーハンドで「まち」の将来像を描くようなイメージです。市民参画型のコミュニティづくりが基本となります。そして、この二つの取組のベクトルを同じ方向に導くことを広義の「まちづくり」と呼んでよいかもしれません。

和歌山市では「都市計画マスタープラン」を策定しています。その骨子は、土地利用の状況や地域特性、市街化区域と市街化調整区域などを考慮して、和歌山市を8つの地域に区分したうえ、地域別の構想が示されています。

さて、私たちは、この「まち」をどんな「まち」にしたいのか？というテーマについて「まちづくり」からのアプローチです。「まちづくり」とは先ほども言いましたように「コミュニティづくり」が、まずもって重要ということです。「コミュニティ」とは「課題を共有し解決しようという人々のつながり」のことを言います。色々な「コミュニティ」があると思います。町内会・自治会などのエリア型、NPO・ボランティアに代表されるテーマ型などです。先ほど和歌山市都市計画マスタープランでは、市内を8地区に区分していると申しました。この研究会では和歌山市を5つのエリアに分けてみました。ごく自然に「まち」の生い立ちから考え、5つに分かれるだろうと、まさにフリーハンドで線引きしました。

フリーハンドで書いた線は、議論の途中で変わっても良いし、エリアが増えたり減ったりしても、「まちづくり」にとっては構わないでしょう。5つのエリアをつぎのように名づけました。①まちなか城下町エリア②万葉の地エリア③歴史遺産リゾートエリア④学研都市エリア⑤田園都市エリアです。

そこで、これらエリア毎の課題を共有し解決・議論する場が必要となってきます。どんな「まち」にしたいのかという議論をメンバー間で行う際の一例を示します。私たちの「まち」にとって、「暮らしやすい」、「居心地がよい」、「こころ豊かになる」、「自慢できる」、「未来への希望がある」などのキーワードを満たしてくれる条件は何だろうと考えてみます。同じキーワードでもそれを満たす条件は、エリアによってずいぶん違ってくるのではないのでしょうか。

つぎは、テーマ毎の課題です。例えば公共施設の将来的なあり方を考えるワークショップの開催などです。和歌山市には色々な公共施設がありますが、議論の一例として、「市民図書館」を示してみました。「雄湊地区・昭和56年築・7,289㎡・4階建て・耐震改修必要（平成25年4月1日現在）」という情報開示のもと、規模は？場所は？アクセスは？というような角度から将来的なあり方・位置づけを市民目線で議論することは有意義ではないのでしょうか。もちろん、議論の結果を受けて、都市計画という専門性をもった議論が登場しなければなりません。

最後に、エリアごとテーマごとの議論をする場として「和歌山市まちづくり協議会」の設立を提案します。例えば既存の「まちづくり1000人会」という組織を母体にスタートを切るのも良いでしょう。同会は平成17年にできて現在334人会員があると聞いております。会員の居住地は5つのエリアに分布しています。もちろん市民以外の方も会員に

いらっしゃいますが。

和歌山市の「まちづくり」と「都市計画」の歯車が噛み合って、持続可能な和歌山市の広義の「まちづくり」が完成することが望めます。以上です。

【足立】

地域ごとと人のつながりを重視したまちづくり協議会という市民参加のまちづくり組織の提案と、都市計画、ハード整備とかも含めた都市機能面の効率化といった観点からお話しをいただきました。続きまして鈴木さんお願いします。

【鈴木】

鈴木です。報告書の18ページから22ページがこれからお話しをしたいところです。私は、歴史と文化という視点から魅力あるまちの条件について話をしてみたいと思います。良い地域、良いまちの条件はひとつではありません。そのうえで、一つは水、もう一つは景観、さらには、ものづくりが息づいていることを挙げたいと思います。そういった例を挙げてみましょう。古都といわれる京都、城下町と言われている金沢であり松江であり彦根であり、あるいは越前大野、熊本、弘前、どれも水がまちのキーワードになっています。あるいは景観・ものづくりがキーワードになって魅力的なまちをつくっています。そういう意味でわが和歌山市はどうなのか。これまでこのまちの歴史であり文化については様々な場面で語られてきました。行政も説明し、市民もそれを生かしたまちづくりという提案、運動をしてきました。しかしながら、和歌山市のもっている地域資源としての歴史・文化というのを十分に掘り起こしてこなかったのではないかと。むしろこのまちは文化不毛の地だという風に言ってきたのではないだろうかという反省があります。そうした中でもう一度このまちの歴史・文化を捉えたまちづくりを考えていく必要があるのではないかと考えています。中平さんから歴史的観点から和歌山市は5つのエリアにゾーニングできるとのお話しがありました。この和歌山というまちが大変多層的でかつ重層的な歴史をもったまちであるということでもあります。それが実は和歌山市の魅力といえるのです。そこで、この全てを一緒に考えるから和歌山市の姿が見えなくなってくるのではないだろうかとは私は考えています。やはりこのまちの顔というのは和歌山城だと思います。その和歌山城を中心とした景観。さらには和歌浦もそうだと思います。もう少し具体的にいうと、江戸をキーワードにして、和歌山城を中心とした城下町エリアと和歌浦エリアを結んで、かつての和歌道を、江戸街道と呼び、沿線周辺を面として整備していく、大胆なまちづくりというのが大事ではないかと思っています。この和歌山城周辺の魅力というのが文化・歴史なわけですから。では和歌浦はどうでしょうか。和歌浦はあの場所から魚市場がなくなったのに伴って今日の衰退が始まったと、地元の方々とお話しをされると言われます。もう一度和歌浦に市場的な機能を持ったものはできないのかと思います。つまりそこでは、景観と食文化とを結びつけるようなまちづくり戦略ができるのではないかと。このまちがこれまで失敗してきたひとつの大きな理由は、やはり伝統であり文化といったものに対する尊敬の気持ちが欠けて



いたということだったのではないかと思います。歴史に学んでいるようで学んでこなかったのが私たち和歌山市民ではなかったのか。さまざまなものづくりがあります、そのものづくりが尊敬され、たくさん行われるようなまちにしていくということです。和歌山城を中心にして魅力を整理し、まちの姿をつくり、ブランド戦略を展開していくことが 2040 年に向けて大きな目標・課題ではないかと私は考えています。

【足立】

歴史と文化の側面から和歌山市の魅力、そしてそれをどのように活かしたらよいのか、という観点からお話しをいただきました。鈴木さんは、駿河屋が店を閉じることになり非常に残念だということでいろいろ論文をお出しになっています。続きまして大泉さんお願いします。

【大泉】

大泉です。報告書の 13 ページから 15 ページ、それから 35 ページから 36 ページが私の担当です。この中から 2 つのことを申し上げたいと思います。1 つは、賢く収縮するそして賢く成長する。この 2 つを両立させたいと思っていますので、そのことを具体的に土地利用ということに即してお話したいと思います。和歌山市は大変な人口減少が続いています。国立社会保障・人口問題研究所の推定によると、現在の時点で和歌山市の人口は 37 万人を切っていますが、これが 2040 年には 28 万人ぐらいになる、つまり 4 分の 1 の人口が減ってしまうのです。



わずか 30 年間で。人口がこのような急激に減少するなかで何が起きているかという、市街地でも周辺の郊外でも、これは私が考えた言葉ですが、逆スプロールという現象が起きてくるのです。スプロールとは、郊外で開発が無秩序にバラバラと虫食い状に進行していくことですが、逆スプロールはその反対で、市街地でも郊外でも、たくさんの空き家ができ、あまり利用されないような公共施設が増え、また、開発すべきだけれどもできない空き地が増えていく。そういう状態がそれこそ虫食い状に郊外でも市街地でもドンドン広がっていく。これを私は逆スプロールと呼んでいます。こういう状態が続くと本当に都市は衰退してしまいます。郊外でも市街地でも、すでに開発され利用されている場所と利用されていない場所が交錯しあっているわけです。こういう状態がそれぞれまとまって利用するところはする、利用しないところはしないというように、それぞれ整理、集約していくことが必要なのです。手法的には市街地ですと、例えば修復あるいはリノベーション、そして再開発といったような方法がありますし、農地については耕地整備のための換地という方法もあります。そういった手法を活用しながら、市街地でも郊外でも利用する空間と逆に利用しない非利用空間をきっちり分け、利用地についてはしっかり有効利用し非利用地は手をつけない。むしろオープンスペースとして保全していく。これによって郊外では開発を限定あるいは抑制し、そして市街地ではオープンスペースを確保しながら有効利用を進めること。これを提言したいのです。それからもう 1 つは、2040 年の和歌山市がめざす都市のイメージをどう考えるかということです。私は、19 世紀の末から 20 世紀

の初めにかけてイギリスで提唱され実際に建設された、ハワードの田園都市というビジョンを改めて振り返る必要があると思っています。日本では田園都市というと、都市郊外のベッドタウンというイメージがあると思うのですが、ハワードの田園都市はそうではなくて、工業があり、農業があり、そして住まいありという、住まいと職場が接近し非常にバランスのとれた、わりと小規模のまさにコンパクトな都市の建設をイメージしていたのです。中心にほぼ5万人の都市があって、周りに3万人程度の複数の都市があるイメージです。それで、合計25万人規模の田園都市群というのがハワードの構想だったのです。ところで、2040年の和歌山市は28万人という予測でしたね。ということはほんとにぴったりと規模が重なります。あるいはこれが都市として適正な規模だと言えなくもない。報告書で提案している5つのゾーンがそれぞれ個性を持って整備され、お互いにリンクしていけば、市民が暮らしやすい個性あふれた和歌山市が出来上がる。そういう前向きのイメージ、目標を持って30年後をめざしていく。このことをぜひご提案したいと思います。

【足立】

大泉さんは都市政策を中心にいろいろと研究を進めてこられました。今、利用する空間と非利用空間をきっちり区別するべきだとのお話がありました。またハワードという人は有名な都市学者で、衣食住そろったようなだいたい人口5万人くらいの都市を作っちゃえということで実際に理想郷といわれる街を作った人なんですね。今から100年くらい前ですけども、こういったビジョンが、まさにこれからの和歌山市に当てはまるんじゃないか。そういうヨーロッパの空間的な要素を和歌山市は持っているのではないかというお話でした。それではこれからは、和歌山の10年後のビジョンについて、そしてどんなまちづくりをするべきかの観点からお話を伺いたいと思います。木下さんからお願いします。

【木下】

10年後の和歌山のビジョンということですが、私たちの周りのさまざまな社会情勢、環境というのが否応なしに変化し進んでいきます。自分たちがこうしたいからといってその通りになるとは限りません。したがって、今現れている現象はやはりそのまま進んでいくでしょう。しかし、知恵のある我々あるいは考えのある我々は、それを先読みして、その現象面を緩やかに改善していく、改革していくというような動きが必ず出てくると思います。今、私の発表と中平さん、鈴木さん、大泉さんにいくつかご提言をいただきました。そういった個々の観点からみなさんそれぞれ知恵も出されて活動されるはずで。そこで私の考えは、それが単独の一人旅にはならない、各展開が有機的に結合し連携して全体推進するように仕向けることなのです。そもそもどんなまちにしたいのかという、将来ビジョンとか基本的な考えを築き上げることが最も重要で、そしてそのビジョンや目的を、市民を中心にした行政、民間の事業者と私たちのような研究者や有識者といった、いわゆる「産官学+住民」の4者が共有することに注力すべきと思っています。この共有するビジョンづくりのためのプラットフォーム、議論をする場所をしっかりと設定することが必要だと思っています。そのプラットフォームができて、しっかりとしたシナリオの中でそういった議論ができれば、報告書の12ページにあるロードマップの1番から11番までの運営進展が可能になるはずで。私はそう信じています。最初は無理であっても、それぞ

れのステップごとにクリアしていけば必ず最終の段階にまでたどり着けると考えています。その後、確かな個別の事業なりその地域それぞれの個性豊かな地域づくりが各地域の中で行われた上で、最終的には2040年につながる、健康で持続可能なまちが成立しているのではないだろうかと信じているということです。

【足立】

共有するビジョンを作るということが大事だということですが、私の経験上いろんな主体がそれぞれ意見を出し合って、なかなかまとまらないことが多い気がします。よくまちづくりで大事なものは、まとまる、そしてわからないと勉強会をする、そして地域エゴにならない。この3つの要素が大事だと言われていますが、共有するビジョンを作る時のなにか木下さんなりのコツみたいなものはありますか？

【木下】

私から申し上げることがあるとすれば、当然ながら、ステークホルダーは個々の自分の利益を誘導することが優先するでしょう。たとえば、行政は、財政なり関係者の公平性を守りたいとなります。事業者は自社の利益を追求する。住民は自分たちの権利を守りたい。あるいはその居住関係を守りたいと。これは全く否定するところではありません。だから、相容れない部分が出てくるのでなかなか同じテーブルにつけない。そこで、この部分を最初の段階に全部出してしまうのです。何ごとも同じでしょうが、交渉ごとも含めてお互いの立場を尊重するのは確かですけれども、その絡み合いをまず取り除く、垣根を取っ払うことだと思います。だから先ほど申したプラットフォームの中で、それぞれの思惑を全部出すことでしょう。掴み合いの喧嘩になるかもわかりませんが、そういったことを経験してそれを乗り越えない限り、共有ビジョンというのはできないと思います。先を見据えたうえで、困難なところから不退転の決意で取り組むことだと思います。

【足立】

大泉さんは海南省などの中心市街地活性化協議会に携わっておられましたが、この点どうでしょうか？

【大泉】

確かにいろんな意見や利害の違い、対立はあるのでその調整は非常に難しいですけど、今たまたまご紹介いただきましたけれども、海南省でも田辺市でも困難を抱えながら中心市街地の活性化に取り組んでおられますが、活性化基本計画は策定に至るプロセスが非常に大事で、事業者、市民のみなさんが率直に意見を言いながら勉強をしながら、1つ1つの計画を作りあげていくというその熱意、そこがやっぱり鍵だと思います。まちを愛する、くじけない、諦めない。そういう熱意じゃないでしょうか。

【足立】

たしかに熱意はすごく大事ですが、熱意が強すぎちゃって、互いに譲れないみたいなことはないですか？

【大泉】

事業者のみなさん、市民のみなさんはほんとに個性的ですから、そういう局面もあるでしょうが、お互いの信頼関係があれば…。

【足立】

粘り強く調整をするべきだと。

【大泉】

ええ、それは本当に知恵ですね、大人の知恵だと思いますよ。

【足立】

木下さん、今のお話しは、大人の知恵ということで何とか良いアイデア、良いビジョンを作っていこうという意見だと思うのですがどうでしょう？

【木下】

結論を申しますとそれでないと解決しないと思います。決定的な意見の相違を内に秘めたまま合意ということ、あるいは共有していくというのはたぶん不可能でしょう。どこかの時点で裏切り行為が発生したり、離脱したりするというのが当然起こってきます。やはり最初に交渉ごとでもトラブル処理でも同じで、先送りにしないということですね。そこで必要となるのは、先ほどの大人の知恵と全体的なコントロール、コーディネーター的なセクションをやはり作っておくことだと思います。

【足立】

中平さんに10年後のビジョンというテーマでお話しをいただきたいと思います。

【中平】

どんなまちにしたいのか？と問われれば、私は、一言で言うと「人気（ひとけ）」のあるまち、人の気配のことです、になればいいと思います。先ほど足立先生から中心市街地の通行量が激減した、というお話がありましたが、確かに閑散としていますね。しかし「人」は歩いていませんが、「車」は絶え間なく走っています。よくよく考えてみますと、その「車」の中には「人」がいます。私も車を使いますが、自身の反省も踏まえて、車から人が外へ出てくる何か仕掛けができないだろうかと思います。車がたくさん走っている「まち」が活気のある「まち」とは思えません。やっぱり「人」がたくさん歩いている「まち」が活気のあるまちです。

また、一杯飲みに行く率がワースト1というお話もありましたが、住んでいる人もそうですが、「まち」へ訪れた人も外へ出かける仕掛け。そういう人たちを増やす「観光」というテーマに着目したまちづくりが良いのかなとも思います。住んでいる人だけの「まちづくり」ではなく「訪れる人」にとっても魅力のある「まち」が良いと思います。

【足立】

ヨーロッパのまちを歩いていますと、結構まちなかを人が歩いていて楽しそうに買い物をしているんですね。そうなったらいいなと思いつつ、日本では、なかなかそうならないのはどうしてなのでしょう？歩いて楽しいまちづくりへの具体的な妙案というのは何かお持ちですか？

【中平】

どうでしょう何が良いでしょう。基本的には、都市の機能や施設づくりのまえに、コミュニティづくりが重要な気がします。コミュニティが形成されたときに交流が発生し、「人」が外へ出てくると思います。ちょっと話が広がりますが、今、家のなかで一人で遊ぶ子ども

も多いのではないのでしょうか。子どもたちが外へ出て、みんなで公園で遊ぶ姿を見かけるだけでも感動したりします。そのあたりが、原点なのかなと思います。

逆に言えばりっぱな都市機能を備えても、コミュニティがなければ何にもならないと思います。

【足立】

人を集めるのが上手と思うのが、長崎市や金沢市ですね。長崎市では、さるく博っていう歩く博覧会を半年間やって 1000 万人を集めています。金沢では 21 世紀美術館という市民に利用しやすい美術館が人気を集めています。この点について鈴木さん、何かございますでしょうか？

【鈴木】

やはり、まちの中の魅力づくりをどういう風に行うかというところに結局は尽きると思います。魅力がなければ歩くこともないし人もやってこないだろうと。魅力のあるところに、多くの人がやってきて、そして予想もしない出会いがあって、新しいものが創造されてくるものと思います。和歌山市の魅力、ブランドをどういう風に作るかということが結局は問われているということではないのでしょうか？

【足立】

やっぱりブランドを作っていくということですが、中平さん、和歌山でブランド力を作るとしたら何かこう妙案はないですか？

【中平】

和歌山市の「観光振興計画」を作ったらどうでしょう。もちろん、わたしたちの「まちづくり」は観光というテーマで議論してみようとなればの上です。先ほどの木下さんのお話のように合意形成が重要です。市民が「観光まちづくり」を議論し、市民の議論を受けて戦略的な「観光振興計画」づくりとなります。ここで都市計画部門といいますか専門家が登場ということになるんだろうと思います。「観光まちづくり」の中でアイデアはたくさん出てくるだろうと思います。

【足立】

大泉さん。

【大泉】

和歌山市にブランドがないということじゃないと思います。あります。実際に私の体験で言えば、日曜日になりますと JR や市駅からのバスを利用して、市外からたくさんの人たちがハイキング姿でお城に行くんです。あるいは和歌浦に行くんですね。市民にとっては当たり前の光景だから大したことないだろうと思うかもしれないけれども、外のひとから見れば和歌山市には大いに魅力があるということを、われわれは気が付かなきゃいけないと思いますよ。ブランドはよその人たちが認めるかどうかということもありますから。

【足立】

「全国一自分のまちを謙遜する」というデータがありまして、1 位と 2 位が徳島と和歌山らしいです。そういうデータもあって、和歌山の人はどうしても自分のまちをあまり自慢したがるらないということなんですが。鈴木さん、10 年後についていかがでしょうか？

【鈴木】

今の話についていうならば、それは地域の持っている資源に気が付いていないし、気が付く作業をしていないという結果だと思います。それで10年後の和歌山市についてですが、足立さんと同じで私も千葉県出身です。私が和歌山市に住みたいと思った理由は和歌山城があったからでした。その和歌山城を大切にしたいまちづくりを10年後にも大事にするまちであってほしいと考えています。つまり、歴史と文化が集積する創造的な都市であってほしいというのが私の考えです。日々新しいものが生まれ、伝統と革新が交錯しているようなまち。まちが持っている歴史や文化というアイデンティティが大切にされるまちです。今のままだとまちは確実に老いていきます。だから、まちの中に若い人が暮らすまちに変貌させることが必要だと思います。具体的には、和歌山大学はもう一度まちなかに帰ってきたほうがいい。中心市街地に土地があるのかという問題もありますけれども、大学があれば若者たちが集まり若者がしょっちゅう行き来する。いろんなところで若者が地域のまちづくりに参画していく、そういうまちづくりが行われるわけです。ドキドキする物語、ワクワクするような物語、そういったものはやはり若い世代のいるところから生まれてくるのではないのでしょうか。さらに、地域活動団体の中に、私は女性会議の設立を提案します。男性中心のまちづくり会議は、さまざまところで限界に達しているところがあります。むしろ女性の方々が中心になって活躍できるような、女性のアイデアが生きるような、そういう女性会議というのを是非作ったらどうかと考えています。以上です。

【足立】

今、和歌山大学を中心市街地に移転させた方がいいのではないかというご提案と、また女性組織を作るという、具体的な提案であったかと思います。和歌山大学の学生の調査で、和歌山市の中心市街地活性化基本計画をどれだけの人が知っているかと市民に聞いたら、80%以上の方が知らないという結果でした。このまちで何が行われているか、どのような計画があるのかがほとんどの人が知らないんですね。鈴木さん。こういう人たちに対してどうしたらいいのでしょうか？

【鈴木】

やはり、ひとつは情報発信の問題だと思います。若い世代に届くような情報発信は行われていないということ。もうひとつは若い世代、学生たちがこのまちで自分たちが暮らし、学んでいる和歌山市で何が起きているかについて関心をもっていないという、ふたつの問題があると思います。ただ、彼らはフィールドワークとか様々なことを行ったりすると地域に関心を持っていく、そういう柔軟な感性をもっています。だから若い世代がこの地域にインセンティブを感じるような、そういうまちづくりというものが行われていく必要があるんだろうという風に考えます。

【足立】

木下さん、今の話にまちなか人口を増やすという言葉があるんですけど、この点いかがでしょうか？

【木下】

中心市街地活性化基本法に基づく各施策は、和歌山市も1999年ごろから取り組んでき

ており、一応、一定の成果が挙げたということで評価されていますが、現実にはそのような実感はないと思いますね。そこで、鈴木さんのご提案にありました、大学を中心地に回帰させるということですが、これは最も有効な手立てだと我々も以前からそういうことを考えて提案はしてまいりました。和歌山大学の観光学部を中心市街地という計画でしたが、うまくいきませんでした。とても残念です。もし実現していれば、今この中心地で毎日学生が1,000人近く往来しているわけで、それだけでも活性化していたはずですが、えすがえすも残念です。現実には、ではどうするんだといえ、中心市街地でモノが動くか人が動く仕掛けづくりをすることだと思います。情報発信だけではだめです。たとえば、足立さんたちが中心になって中心市街地で学生が主導して交流サロンを作って運営しています。このようなチャレンジショップ的な仕掛けを、もっと広くもっと頻繁に行うことだと思います。それを大学のカリキュラムの中で評価することもできるでしょうし、和歌山市からすれば、市内の活性化ですので様々な補助金等の交付も考えられると思います。そこで、学生だけではだめだというのであれば、NPO法人やその他団体とのコラボレーションを、もっとインセンティブがわくような仕掛けづくりをしていくことがポイントだと思います。お金なのか人手なのか、あるいは場所なのか、あるいは最も重要な熱意なのか、また、共有するビジョンがあるのか。こういったところをきちっと分けて対処の方法を考えて提案していくということだと思います。

【足立】

具体的な提案ありがとうございました。続きまして大泉さんお願いします。

【大泉】

10年後といいますと、ちょうど私を含むその団塊世代が75歳の後期高齢者に入ります。高齢化が一段と進むということが1つです。それから、現在もそうですけれど、単身世帯が若者も中高年も含めてどんどん増えている状況です。だから10年後の和歌山市は高齢化と単身世帯化が一段と進む。そういう中で、孤立しがちなんだけど孤立しては生きていけない、そういう人たちを支える地域づくり、対人サービスの面でも公共サービス・インフラの面でもしっかり支えるまちづくりをしていかないと、この10年後はとても乗り切れないでしょう。そういう課題をクリアしながら10年後、20年後、30年後に進んでいくということを期待しています。

【足立】

インフラの整備、例えば和歌山市の場合、下水道の整備率があまり良くないのですね。こういったことも含めて整備していくということですか？

【大泉】

下水道の整備も必要でしょうが、例えば、コミュニティの活動を支えるボランティア、サークル、NPOの活動があって、そういう人間と人間とのつながりを支える、支援するような人たちがどんどん動いていけるような地域づくりが非常に大事だと思います。

【足立】

では次に、中平さん一言コメントありますでしょうか？

【中平】

高齢化社会を迎えて、高齢者すなわち 65 歳からですが、まだまだ若いと思います。もうひと踏ん張り「まちづくり」を担ってもらうために、65 歳の成人式を実施しても良いのでは。和歌山市も二十歳の成人式はやりますよね、同じように 65 歳になる和歌山市民の方の成人式を実施します。案内を差し上げたら、結構集まると思いますよ。ずいぶん久しぶりの同窓会のようなものではないでしょうか。まあ一杯飲み会も増えるかもしれません。その成人式の機会に、今後何等かのコミュニティに参画してもらうようインフォメーションをします。この仕掛けは和歌山市の活性化につながるのではないかと考えています。

【足立】

一言です。鈴木さん

【鈴木】

一言だけ。若者よ！本を捨ててまちに出よという言葉がありますけども、高齢者よ！家に閉じこもってないでまちに出よと言いたいと思います。

【足立】

みなさん、ありがとうございました。今のご意見を総合すると、和歌山は非常に魅力のあるまちである。それをどう生かしていくのか。例えば大学の移転の話も出ましたし、65 歳の成人式も出ました。各論もいろんなアイデアが出てきたかと思います。これらを活かしたまちづくりを目指せればと思います。

■第二部 パネルディスカッション

【中村】

こんばんは。和歌山放送の中村です。今日は和歌山地域経済研究機構主催の、これからの和歌山市のまちづくりの在り方を話し合うシンポジウムに、来月行われる和歌山市長選挙に立候補を予定されている皆さんにお越しいただいています。みなさん大変お忙しい中お越しいただきまして本当にありがとうございます。これからの和歌山市のまちづくりを進めていく上で、和歌山市長の役割ってというのは徹底的に重要になるわけで、この和歌山市長選挙に立候補を予定されている方々から、まちづくりのお考えを聞かせていただくことは大変意味のあることだと思います。パネルディスカッショ



ンの進め方としては、3つのテーマに絞って、まず研究メンバーの先生方から2分間で問題提起をしていただきます。そしてそのあと各予定候補者の皆さんに1テーマ4分以内でお考えを伺っていくことにしています。最初のテーマは少子高齢化、人口減少が進む中で、これからの和歌山市のまちづくりをどうしていくのか。木下さんから賢く縮小、賢く成長というテーマで、2分間で問題提起していただきます。

【木下】

テーマのひとつは「賢く縮小、賢く成長」いう問題提起です。第1部でも議論しましたが、このままでは立ち行かないというのが目に見えてきている時代です。今朝の新聞でも和歌山県の人口動態が発表され、どんどん人口が減っており、なおかつ出生率がワースト8位という結果が出ています。また、つい先ごろ国土交通省がまちづくりの拠点の指針を出しています。これは全国的に集約できるところは集約してあらたな地域の拠点を作り出す、つまり集約移転を進めるということをはっきりと示していくということです。したがって、和歌山市も同様に、このままでは立ち行かないのでやはり、どこかに集約移転していくことが必要となるということです。これはイコール縮小する、あるいは縮退していくことだと思います。この点に関して、具体的に各立候補予定者の方々がどうお考えなのか、ご自分のビジョンがあればお話いただきたいと思います。

【中村】

それでは予定候補者の皆さん持ち時間4分で順番に伺っていきます。50音順に伺っていきます。まず、遠藤富士雄さんよろしくお願いします。

～以後、各位の発言を要点として掲載する。尾花氏は移動中で2つ目のテーマから参加～

【遠藤氏】

<要点>

・人口減少への歯止めについて、少子化対策として保育料の無料化、幼保一元化、若者の回帰、中心市街地活性化への真剣な取組、まちなか居住の推進。

【小早川氏】

<要点>

・市民目線で考える、建築物中心のハード整備のみからテナント内容等ソフト部門の備わった地域開発の推進。

【芝本氏】

<要点>

・縮小することでバージョンアップすることは可能、コンパクトシティ化は時代の流れ、社会インフラの老朽化に対する効率的な整備方針、例えば市民会館と市民図書館と県の各施設の共存のありかた、障害をもったひとや高齢者にもやさしいまち、移住促進、スマートシティ化による縮小と成長の共存。

【中津氏】

<要点>

・人口減少に合わせた縮小型の都市づくりを目指す、市内全域で安心して住み続けられ

るまちづくりが必要、歩いて生活できるまち、子育て世代の若い人が働きやすい雇用環境づくり、大資本は中小零細との共存を。

【浜田氏】

<要点>

・和歌山市は賢く成熟すること、40万都市の復活、地域間競争に勝つ、人は魅力あるまちに移り住むので住みやすく育てやすく働きやすいまちづくり。

【中村】

次のテーマは中心市街地活性化と郊外化進展のバランスのあり方について、和歌山大学経済学部教授の足立基浩さんから問題提起していただきます。

【足立】

第2テーマとして和歌山市の中心市街地活性化と郊外化のバランスについて問題提起をします。日本全国で中心市街地が元気な地域を見てみますと、富山、青森、金沢などがあります。これらの地域は交通政策でいろんな工夫をしたり、いろんなメリハリのあるまちづくりをやっています。一方で、あまり元気ではないところでよく挙げられるのは、浜松と福井と実は和歌山もその中に入っています。そこで皆さんにお伺いしたいのは、中心市街地を活性化させるべきなのか？郊外化も進んでいる中で、郊外と中心市街地のバランスを考えたときに、予算を含めて中心市街地を活性化させるべきなのか？もしそうだとしたら、何かアイデアはあるのか？この2点、お伺いしたいと思います。

【中村】

先ほどの逆からお話しをいただきます。

【浜田氏】

<要点>

・中心市街地活性化は必ず必要、財政改善にも寄与、高齢化の進展は生活様式を変える、脱車生活で公共交通利用促進、歩いて生活できる中心市街地が必要、生活インフラが整備されたまちなか居住の推進、税制優遇と冷遇の組合せで土地利用の効率化。

【中津氏】

<要点>

・地域コミュニティの充実による生活防衛、公共交通の整備と利用促進による生活様式の変化への対応、インフラ充実した中心市街地での雇用創出と居住促進。

【芝本氏】

<要点>

・中心市街地の活性化は最も重要、郊外化は自然に収束していく、ランドマークとして和歌山城、伏虎中学校跡（H29）に“まちの駅”を作り集客、中心市街地と郊外型店舗の共存。

【小早川氏】

<要点>

・今までのモデルではない新しい地域活性化モデル、和歌山の玄関口に和歌山らしいモニュメントを、人材の有効活用。

【尾花氏】

<要点>

・中心市街地活性化は和歌山市全体の発展のエンジンとなる、まちなか居住促進に注力、中心市街地に教育複合機関の誘致、和歌山城をシンボルにした開発、駅前玄関口の魅力再開発、住みやすい郊外地域核の整備によるバランス確保。

【遠藤氏】

<要点>

・民間主導型のまちなか居住推進による中心市街地活性化、インセンティブ付与と税体系及び条例の一考、中心市街地への公共施設群整備による活性化、既成概念からの脱却。

【中村】

最後のテーマです。産官学+住民による共同参画型の地域活動の推進です。和歌山社会経済研究所研究委員で NPO 法人市民の力わかやまの糀谷昭治さんから問題提起させていただきます。

【糀谷氏】

最後の問題提起を担当します糀谷です。和歌山市のまちづくりは、1999 年に中心市街地活性化基本計画の策定から始まり、15 年経ちます。この間で、産官学民による協働の必要性は十分浸透しました。活性化計画も協議会も産官学民で何度も作られました。しかしながら現在は、地方都市の衰退の例に挙げられるほど和歌山市はその活性化計画がうまくいかなかったという風に考えられます。計画とそれから協議会はできたんですが、実際の計画を実行する実行組織というのが全然見えませんでした。その結果が今になっているんだと考えます。実際に産官学民が共同して事業、あるいは行動する推進組織というのが大切だと思うのですが、これに関して、お考えを聞かせてください。

【中村】

産官学民による共同参画型の地域活動をどのように推進していくのかという問題提起ですが、今度は遠藤富士雄さんからです、お願いします。

【遠藤氏】

<要点>

・和歌山の立ち直りは住民参画による産官学民、地域特性の市内ゾーニング、地域特性の連携とトップのリーダーシップ、まちなか回帰を、わかやま LOHAS を 2040 年まで歴代市長が引き継ぐこと。



【尾花氏】

<要点>

・4者体制は間違いなく重要、個別地域では特色ある実行部隊で活動中、中心市街地は複雑、テーマやエリアを小さく区切ったほうが取り組みやすい、スピード感をもったまちづくり会社などの活用。

【小早川氏】

<要点>

・住民代表の議会も含めた常識ある活動を、文化と若者で活性化、市民・住民目線で予算配分。

【芝本氏】

<要点>

・過去の失敗事例は地域当事者が入っていないから、形づくりの協議会になっている、このままではだめだという危機感の乏しさ、産官学住の微妙な距離感、まちづくりに関する人が育ちつつある、やる気と熱意のある人を支援する体制。

【中津氏】

<要点>

・まちづくりの主役は住民、日常生活の中に多くの課題・要望がある、住民の力は増大している、住民が先頭で行政・事業者・研究者がフォローし役割分担。

【浜田氏】

<要点>

・過去の仕組みは官がまずあり学産、今求められるのは住民参画の生活者目線、4者の切磋琢磨による戦略的施策、最終集約は市長のリーダーシップ。

【中村】

貴重な意見をほんとにありがとうございました。きょうは予定候補者の皆さんのこれからの和歌山市のまちづくりについての考えがよくわかったと思います。高齢化と人口減少社会は待ったなしでやってきています。日本創世会議がこの5月に発表した試算では、全国でおおよそ半分にのぼる896の市町村が消滅する可能性があり、和歌山県では全市町村の4分の3以上というさらに深刻な状況となっています。この推計データによりますと、和歌山市の人口は26年後の2040年には27万5000人あまりと、2010年に比べて43%も減少するとみられています。また先日国土交通省が発表した国土のグランドデザイン2050では、これまで常に掲げられてきた国土の均衡ある発展という文言がはずれてしまいました。これは地域間競争がいつそう熾烈に進んでいくということであり、高齢化・過疎化が全国平均を上回る和歌山県にとっては、大変深刻な問題で、危機感をもって対応する必要があります。県と和歌山市のまちづくりはそういった意味でも、和歌山県にとっても極めて重要な政策課題です。新しい和歌山市長には、ぜひ今夜のパネルディスカッションの討論を踏まえて、和歌山市のまちづくりに取り組んでいただきたいと思います。また今夜このパネルディスカッションに参加していただいた市民の皆さんにはこれからの和歌山市のまちづくりにぜひ参加していただければと思います。皆さん、今日は夜遅くまで、

お付き合いいただき、ありがとうございました。



最後に、木下による閉会挨拶をもって、シンポジウムは終了した。